

# 良心の碑 いしづみ

聖書の言葉

「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べものよりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなた方は、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意してみなさい。働もせず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりも先ず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

マタイによる福音書 6章 25節~34節  
朗読者：小崎敬子

12月 月例会

日時 11月13日(火) 13:30 ~ 15:30  
発表者 大和忠 やまとのかみ ただゆき (大和守 忠行)  
新島襄伝『八重の腕に抱かれて』



◇講談のニューヒーロー

江戸の辻講釈から生まれた講談では、幕末から明治初期に活躍する人物(かれらの多くは薩摩人・長州人)が取り上げられることがほとんどありません。江戸っ子は徳川鼻頂だからです。新島は徳川譜代大名の直臣で、なおかつ江戸っ子ですから、講談のニューヒーローにふさわしい人物です。

◇東洋風の婦人は御免です

「新島襄伝」前半のヤマ場は、京都府知事榎村の紹介で襄が八重と結婚する場面。

八重が暑さを凌ぐために井戸の上に戸板を渡してその上で裁縫しているのを見て、襄は「榎村さんが勧めるのはこの人か」と気づきました。それ以来、襄は八重の挙動に「目を付けるようになった」そうです。

◇横田安止への手紙

「良心ノ全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ望ミテ止マサルナリ」と横田に手紙を書いた日(1889年11月23日)、新島は神田小川町の榎村医師(山竜堂病院長)の診察を受けました。そのころ新島の病状がだいぶ悪化していました。榎村は新島が最も信頼した医師でした。

◇大磯百足屋から八重への手紙

「お前様、関東にお越しのこと、いまちと暖かに相成り候時がよろしかるべし。私はただただ母上様のことのみ心配いたしおり候。」新島の母親思いの一面がよく表れています。

「大磯に土地400坪を280円で買った。夏には800円で売れるだろう。」新島は死期が近づいているとは全く思っていない。

◇八重が来てからにしよう

1890年1月19日新島に付き添っていた永岡喜八は八重夫人に「先生病状悪化」と電報を打ちました。翌20日永岡は在京の徳富蘇峰(猪一郎)に「先生危篤、すぐ医者連れてこい」と打電。同日小崎弘道、津田仙らにも危篤電報を打ちました。

百足屋に駆けつけるなり徳富蘇峰は、「先生、遺言を」と促しましたが、新島は「八重が来てからにしよう」と応えました。その日夜遅く八重は百足屋に到着したのでございます。

◇遺言

21日午前5時30分、新島襄は枕辺に八重、徳富蘇峰、小崎弘道を呼びよせて、遺言を口述し、蘇峰に書き取らせました。書き取った遺言は蘇峰が一箇条ずつ朗読し、新島に確認してもらいました。遺言が終了したのは午前7時10分前でした。

「八重さん87歳の生涯においても『八重の腕に抱かれた襄』と共にキリスト者の生涯を歩み、若王寺の墓地に二人して眠っているのでございます。」

(文責：支倉清 写真：徳弘篤介)

悪 サッカー・ワールドカップ・カタール大会で日本代表は強豪ドイツとスペインを破り、決勝リーグに進出した。深夜、明け方の試合にもかかわらず、国内は大いに盛り上がった。

ところで、サッカーの「サムライブルー」、野球の「侍ジャパン」。国を代表する男子スポーツチームが「サムライ」の名を冠していることに、違和感を覚えませんか。

江戸時代、武士は理念的には

「人間か斯くあるべし」を体現する規範身分であったが、歴史的事実として武士が人間的に立派で百姓・町人が立派でなかったわけではない。

「武士道」が人びとの関心を集めるようになったのは、新渡戸稲造が1900年 “Bushido, the Soul of Japan” をアメリカで出版し、それが8年後『武士道—日本の魂』として日本語に翻訳されてからである。

しかし、新渡戸の主張する武

士道は、片々たる史実や習慣、倫理・道徳などをかき集めた一種の創作であり、武士とは縁の薄い一般道徳であった。

ちなみに新島七五三太は武士として珍しいほど藩主に対する忠誠心がなかったとよく云われるが、幕藩体制が崩壊する中で將軍や藩主に最後まで忠誠を尽くした武士がどれほど存在したか。新島の忠誠心のなさは珍しいことではなかったのである。

明治生まれの「武士道」は戦

前は軍国主義ナショナリズムと結びつき民衆を痛めつけ、戦後はスポーツ的理念を取り込み、生き延びた。その結果国際舞台でたかう日本人をサムライと形容することを多くの日本人は不思議に思わなくなったのだが、軍備拡張が急激に進むなかで「サムライブルー」に熱狂する光景をみて、新島青年ならば、国の将来を不安視するのではないかと思う。

(支倉 清)